

研究

明治初期の学校教育 (上)

賛助会員 山内武 麒

まえがき

大正の初期から発行されていた『佐伯自治新聞』(後に『佐伯新聞』と改称した)の、大正三年八月九日発行の第七十一号から、五回にわたって、『今昔物語 佐伯学校』と題する、面白い物語が連載されている。

この物語を紹介し、補説を加えながら私見も少しはさんで、明治初期における佐伯の、学校教育の状況をしのんでみよう。物語の文章(カツコ) (レビ示す)は、すべて原文のままとした。

(一)

「明治五年六月始めて、今の様な学校を興す様に県庁からお達しがあった。」

明治五年六月五日に、当時の大分県参事森下景瑞(後に県令となる)が、同年八月の『学制頒布』にききかけて、『建校の告諭』を發し、大分にあった旧府内藩の文武館を、府内学校と称して本校とし、従来藩の学校があった竹田・臼杵・佐伯・杵築・森・日田などに、分校を置くことにした。

一所で翌六年五月、旧三の丸、今の佐伯新公会堂、以前の佐伯尋常小学校に、始めて『佐伯学校』と云ふのが出来た。其時は第二十六区下等学校と云ふのと、上

等学校と云ふ二つに分れていた。下等と云ふのが今の尋常科に当り、上等と云ふのが高等科に当る。生徒は何れも当時私塾であった、松岡塾、楠塾、開塾など云ふ所の生徒が一緒に這入って来た。」

『大分県教育五十年史』を見ると、佐伯には、明治五年に府内学校の分校が出来たとある。この佐伯分校は、三の丸に開設され、慶応義塾から高木喜一郎氏を聘して教師とした。この学校には、正則と変則の二課を置き、正則課では、原書を使って教授していた。そのころ、佐伯ではかつて鹿兒島や神戸で洋学を学んだ人達が帰郷して、同志の人たちを集めて、大日寺の一室を借りて洋書の研究をしていた。この人達十数名も、佐伯分校が開設されるとこぞって入学し、もっぱら洋書の研究をしたという。高木先生は半年ばかりいて帰京してしまい、それから後は正則を廢して変則だけにした。

しかし、佐伯小学校の沿革誌を見ると、佐伯分校が設置された記録も、高木喜一郎氏のことも記載されていない。沿革誌の冒頭には「明治六年、私立学校ヲ創設シ、旧藩主ノ居城三ノ丸ヲ以テ校舍ニ充テ、西名漸・古賀如熊ヲ聘シ、專ラ福沢諭吉、小幡篤次郎等、訳書ヲ教授シ、傍ラ珠算ヲ教授セリ、之レ本校ノ淵源アリ」とある。

この私立学校は、何かの間違いで私立学校が出来たわけではない。公立であったはずだと、この佐伯小学校の沿革誌を讀んだ、日本小学校史を研究している東京学芸大学教授倉沢剛氏が指摘している。佐伯分校が開設されたかどうかは判然しないが、学校が出来たのは、明治六年である。開校当初は、福沢諭吉の『学校取建の記』にのっとって、正則・変則の二課を置き、沿革誌にあるように、明治七年三月から下等・上等に分けたのである。

さて、この開校当時の先生や生徒には、どんな人たちがいたであろう。

「矢田熊太郎先生や、松野茂子氏、古田三郎氏、小寺武太郎氏、吉垣純氏など所謂下等学校の第一期生であつたやうだ。先生には西名新氏、古賀如熊氏、日置泉氏、追々後になつて山崎剛雄氏、高瀬貴一氏、木村辰蔵氏、古賀恒吉氏、それから鶴谷外史、佐藤蔵太郎氏などであつたが、就中、佐藤氏は片目に跛足で天張り今の様に中々気象の教しい人であつたと云ふ。恰度正月一日の事、今で云ふ四方杯の拝賀式が学校で執行されたが、其時先生は七級訓導補と云ふ肩書を持つていたが、先生式辞を朗読し、最後の第七級と言ふ所を、黄い声で一級と言つた様は聞えたので、生徒は式場であるに係らずクスクスと笑つたやうである。昔の事で早速罰を食つた。後に残された所を、日置氏が中裁してやつと堪へて貰つたと言ふ話が残つてゐる。」  
このころの教授法は、いわゆる誹謗及主義・暗誦主義で、幼い一年生からむずかしい漢字を教へ、漢文のような文章を何べんも読ませて暗誦させていた。「読書百べん、意おのずから通ず。」がまかり通つていたのである。習つたとこそさ「分りません」とか、「出来ません」とか言へば、たゞち罰を食つた。

「斯う云ふ風であつたから、罰と言ふのが非常に多かつた。それが立たせて石を持たせる。机を横目せられる。それは様々であつた。石田豊城先生は、納屋の中に立て込まれ、矢田先生の如き毎度床の下に突込まれたさうだ。併し此罰と云ふのが、本が読めんと云へば直ぐやられるので、一日、矢田先生は例の床の下に突き込まれた。床の下では、白墨なんかで、盛に絵を画いて遊んでゐる。今度誰れが来るかなど言つて居る

と、又一人又一人と続々として突込まれる。斯う云ふ風で毎日送つていたものらしい。」

こんな罰なら、あまり恐ろしくもないし、不名譽なことでもあるまい。床の下に突込まれた大勢が、くもの巣を頭にかぶりながら、鬼ごっこでもして遊んでいたのに違ひない。この昔の子どもたちは、どんな遊びをしていただであらう。

「遊びごとは草履の食い合ひ、草履の腐りかかつたのを縄の先に着けて、それで引合をする。小屋を炭俵が何かで作つて、陣屋と称して籠城する。水登り、ドンマ、相撲、などが唯一の遊びであつた。」

それから十年戦争の済んだ後で、水かけの戦争ごとが一時非常に流行した。遊び時間や昼の休み時間、三の丸の池の両側に分かれて対陣し、一ニの三で水かけ合ひをする。着物は勿論じつくり、後には何れも真裸体となつて戦争したさうだ。水が目に入り鼻や口や耳に這入つてくるのを我慢したのが勝で、谷川とか云ふ男が我性なので一番強かつたさうだ。彼は何時でも死物狂いになつて戦つたと云ふ事である。」

昔のこども遊びは、遊びそのものが野性的で、乱暴であるが、男らしく自由奔放にふるまつたことがわかる。

(二)

「小学校は出来、其れを卒業する生徒は出来たが、其の卒業生の進む可き学校がない。そこで卒業生は一時又も私塾に通ふ様になつたが、其内明治十四年四月、南海中学と云ふのが出来たのである。」

大分県には、明治七、八年ごろから中学校が設立されていらしいが、それは単に名を冠しただけのもので、設備も内容もお粗末なものであつたらしい。そこで一通り完

備された中学校と設けて、向学心ある少年たちを教育することゝが急務であるという世論が高まり、ついに明治十三年（一八八〇）の県会で、中学校設立の議が決まって、各郡の町村が連合して設立する中学校に、補助金を出すことになった。そうして、苅葉・佐伯・坂脇・日田・中津・宇佐・臼杵に設立されたのである。この時、佐伯に出発するのが南海中学校である。

「そこで下等学校に一回生として入学した連中が、又も秋を連らねて南海中学の門を踏むに至った。吉垣純、古田三郎、藤井佐一、御手洗由蔵、花井大伴など云ふ連中であつたらしい。校長は最初蘭貫一氏であつたが、十七年十二月から有田要治氏が代つてゐる。其他教員に氏、林加久馬（宇佐郡の人）、三輪修亭（儀作氏兄）、佐藤登二郎、監事に加藤精一、後、岩崎深吉氏が代つて居る。加藤氏は撃劍の師範もしてゐた。学科は今の中学と大同小異で、歴史、地理、修身、物理、化学、数学、生理、経済、博物、画学、文章、書、体操といふ十三科目。授業料拾銭、其れから学校の規則と云ふのが三項に分けて、其れが一々細則が列挙されてゐるが故なくして廊下を乱走すべからずとか、放歌吟詩をなすもの只罰に附すとか、肌膚をあらはし不恭に渉るべからずとか、檢業中妄に教師に対して異見を陳述すべからずなどいふのがある所を以て見れば、随分当時の粗野體面であつた生徒の風態が想像される。」

当時の中学校には、初等、高等の二科があつて、初等中学校が四か年、高等中学校が二か年の課程であつた。しかし、ほとんど初等科だけの学校が多く、しかも三年課程であつた。南海中学校も初等中学校の学校で、修業年限は三年であつた。

「二回生中には、矢田増次郎、中村本三郎、堺田田鶴

水、山口諒太、山口敬次郎、清水英夫など云ふ連中がおり、四級と云ふのは、久保田温郎、深矢恭次郎、原田良介の諸氏、五級は堺田知虎、平山隆策、小野勘治郎、堺田錦十郎。六級は野々下良作、吉田文也、大崎兵助、七級は高橋庸吉、桑原睦作、野村一也、高瀬久穂、蕪節寺蔵、山名驥。八級は豊島貞男、柳井幸太郎、片岡丈吉、安東十郎の諸氏が居つた。」

この願ふれを見ると、今ほみな亡き人たちはばかりであるが、聳々たる人々もなつかしい人々の名も見える。

「それから優等生と云ふものもあつたので、十六年十一月に、矢田増次郎、長田豊太郎、深矢恭次郎の三氏が、「近世名家文粹」か何かを賞典として貰つてゐる。同じく翌年には矢田増次郎、久保田温郎、小野勘治郎、高橋庸吉、高瀬久穂、安東十郎、柳井幸太郎の諸氏が、「王陽明文粹」、「唐宋八大家文讀本」、「春秋左伝校本」、「小學句讀」などいふ本を賞品として貰つてゐる。」

乍来慰勞金と云ふ標名もかも、矢張り當時から既にあつたものであるが、其慰勞金が教師ばかりではなく、生徒にもあつたから面白い。會長と云ふのは寄宿舎か何かの頭であつたものであらうが、市野瀬儀三郎、藤井佐一、矢田、吉垣、山口圭三、中根省三氏などか金五拾宛づつ頂戴してゐる。」

この南海中学校は、佐伯町を以てなく、広く南海郡部の各村々からも入学してゐたので、寄宿舎の備えてあつたらしい。生徒数は十五年に其全部で五十六名で、教員は四名であつたという。

「一方教員養成所が出来たので、小寺武太郎氏など其方へ入学し、又大分に師範学校が出来たので、矢田徳太郎氏などが入学し、其後又大分中学が出来たので、山名、野村の諸氏は其方へ転校する様になつた。」

この学校には、別に六ヶ月で修了する小学校教員養成所が附設されていた。

矢田熊太郎先生は、明治十六年に大分師範学校を卒業して、十八年から佐伯小学校の訓導となり、四十四年退職するまで、二十七年間ずっと佐伯校に勤務した。佐伯校初代の校長である。

「校舎は今の山際の矢野清酒醸造所にあつたので、昔の米倉の跡で、天井に葦藁を張って授業をした位、当時の校舎を撮つた写真が一枚残っているから、次号お友りに銅板にして掲載しよう。」

南海中学校は、山際のお倉おともを使用していたのである。お倉とは藩の米倉のことで、上納米を貯蔵していたのである。校舎のように長い白壁の倉庫であつた。今の法務局のある所に、道路に沿うて建つていた。写真は『佐伯市史』の三三六頁に載っているので、参照されたい。  
(以下次号)

俳句

うめ草まで

花ごよみ (早春から初夏へ) 龍 川

隠察に寒紅梅の花咲けり (一月十八日 養賢寺にまいりて)

翁遊く白木蓮の咲く待たず (二月二十六日 山名先共遊く)

谷あいの梅みな咲けり三軒屋 (三月七日 蒲江に行かんとして)

みたらしの漣のしぶきや椿咲く (三月初旬 赤岳に登りて)

峠越せばうれしや練かる山つつじ (四月某日 難山志志して)

卯の花のこぼれて浮ける谷の水 (五月十四日 小川から直川へ)

雨しとどあじさいは土に重く垂れ (六月の中旬某日)

特別寄稿

立石と緒方惟栄

速見郡山番町立石 会友 伊 東 利

(ご紹介)

昨年十一月二十三日、清田吉藤田君の三宅氏、大分県地方史研究会の行事に参加し、豊前の求菩提へ行って山に登った。そして宿泊した行橋市の旅館で同室の伊東氏と話した。その縁でこの手紙をうたうたが、赦されたことが多いので、掲載することとした。(君崇)

弁復 先般旅行の節は、種々御世話になりました。亦佐伯史談百号を頂くべく申出ました処、最近号態々御慮とに預かり、有難く御座いました。

私より佐伯の方へ御連絡申上げる事とし言へば、すぐ緒方惟栄の事が浮んで参ります。

古くより緒方の姓を称する家の部落が三ヶ所有ります。それらについて詳細に確め(系図等拝見出来ればお願ひしてその上)通信申上げたいが、それでは何時の日になるか分らぬので、是迄き、知っている事を書きつづります。若しかすると、實下立石の現地を既に檢分してある事ですし、御承知かも知れぬと案じています。御承知だったら御宥怒下さい。

(一) 緒方三郎惟栄の墓

立石史談といふ本が立石にありまして、その本によると、馬上八幡宮の前、立石川を隔てて旧国道(唯今其旧々国道です)の西南数歩の田の畔におつたが(現在でもヲガ夕田と呼ぶ)、多分大正のはじめ頃取払い、馬上八幡の境内に移す。高さ二尺八寸、幅一尺三寸、表に、